

2026年4月入学／2025年10月入学（夏期募集）

横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 入学試験問題 解答例・出題意図

建築都市文化 専攻

建築都市文化コース [都市文化系 問題]

横浜都市文化コースコース [Y-GSC]

試験科目 学科試験I

[分野名： ⑩芸術学・芸術批評A]

受験者が、音響文化にかかわるトピックについて、自分の知識や経験に基づいて具体的かつ論理的に記述できる能力があるかどうかを問う問題である。

問題文は、フィールド・レコーディングという領域において、実践と理論の両面で第一人者の柳沢英輔による文章である。ここでは、フィールド・レコーディング行為が、単純な記録行為ではなく、音響メディアの介在する高度に文化的な営為であることが説明されている。フィールド・レコーディングという行為が、どのように、メディアの介在した文化的な営為であるかを、具体的かつ論理的に説明できるかどうかを問うのが問題である。

基本的には、受験者が論理的に記述考察できるかどうかを問う一般論的な問題だが、その際、具体的な事例に言及しつつ説明できるかどうかを問うことで、受験生が音響文化論にまつわる基礎知識を持っているか否かも問うている。

2026年4月入学／2025年10月入学（夏期募集）

横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 入学試験問題 解答例・出題意図

建築都市文化 専攻

建築都市文化コース [都市文化系 問題]

横浜都市文化コースコース [Y-GSC]

試験科目 学科試験I

[分野名： ⑩芸術学・芸術批評B]

芸術批評を志す受験生であれば、リレーショナルアートの枠組みや理論についてはすでに把握しているものと思うが、ジュリア・ブライアン＝ウィルソンが指摘する点については、とくに日本では、さほど議論がされてこなかったと言ってよい。この出題は、ジェンダー視点を導入した際に、新たに浮かび上がる文脈についての見識を問うものであると同時に、既存の作品や実践を、こちらが与えた題目に引き寄せて論述する力と、欧米と日本の状況の一致と不一致をいかに言語化できるかを問うものでもある。

採点基準は、以下のとおりである。

- ジュリア・ブライアン＝ウィルソンの論述、引用されたルーシー・リパードのインタビュー、言及されたニコラ・ブリオー「関係性の美学」、ジェンダー、フェミニズム運動への言及および反論がないものは減点
- 具体的な作品や実践がない場合は減点
- 欧米の話題のみ、日本の話題のみの場合は減点

2026年4月入学／2025年10月入学（夏期募集）

横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 入学試験問題 解答例・出題意図

建築都市文化専攻 専攻

建築都市文化コース [都市文化系 問題]

横浜都市文化コース [Y-GSC]

試験科目 学科試験I

[分野名： ⑫思想・文化論A]

この問題はマルクス・ガブリエル『なぜ世界は存在しないのか』からの引用文を参考に、1) 建築、芸術、哲学、科学、社会論などの分野における「ポストモダニズム」ないし「構築主義」をめぐる議論を、解答者の関心が高い事例の文脈のなかで把握していること、そして2) 「ポストモダニズム」「構築主義」の限界を（これを乗り越えようとする動向とともに）解答者が理解していることの二つを基盤に、「現実」「事実」あるいは「世界」について、解答者の関心があること、関心があるものを事例に論じることを求めた問題である。

なお、思想・文化論の領域の知識だけでなく、文章の読解能力も試験する意図で、引用文を参考に解答させる出題になっている。引用文の議論とまったく関係ないところで、「現実」「事実」「世界」について回答するのではなく、引用文を参考にして論じることが求められていることに注意を払ってほしい。まずは引用文をどのように解答者が理解したのか、それが採点者に伝わるような解答を組み立てることも有効だろう。仮に上記の1) 2) を解答者が熟知していないとしても、引用文を的確に読み取ることができれば、例えば解答が1) に偏ることを避けることもできるはずだ。書名『なぜ世界は存在しないのか』からすれば、「世界」は「構築」された「幻想」にすぎないという「ポストモダニズム」「構築主義」の議論が予想されるかもしれないが、引用文を読めばガブリエルが「ポストモダニズム」「構築主義」を乗り越えようとしていることが読み取れる。そうかといって、観察者不在の「世界全体」を「現実」とする「形而上学」に戻ろうとしているわけでもない（「いずれの理論も、何にもなりません」）。

2026年4月入学／2025年10月入学（夏期募集）

横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 入学試験問題 解答例・出題意図

建築都市文化専攻 専攻

建築都市文化コース [都市文化系 問題]

横浜都市文化コースコース [Y-GSC]

試験科目 学科試験I

[分野名： ⑬思想・文化論B]

多くの思想家、研究者が援用、応用している J.M.オースティンの行為遂行性（パフォーマティヴィティ）の理解と、それに対する周縁遂行体（ペリパフォーマティヴズ）をどのように解釈し、また応用することができるかを通じて、文章理解、基礎文献の知識、理論の解釈と使用法について問うた。

出題意図

芸術学・芸術批評 A

本問は、人類学的概念を思考のモデルとして読み替え、それを具体的な芸術作品の分析へと応用する能力を問う。「ジャガー人間」「機械人間」に代表される、人間と非人間の混在する形象が、対称的で完全には制御できない他者との関係をいかに媒介し、可視化しているかを、論理的かつ説得的に論じられるかを見る。とくに、こうした形象が単なる主題やモチーフにとどまらず、人間中心の主体観や支配・被支配の図式を揺さぶり、新たな思考の枠組みを可能にする装置として機能するさまを、作品固有の表現形式や文脈に即して論じる批評的思考力を評価する。

芸術学・芸術批評 B

都市における音やリズムに関して述べた問題文の意図や背景を適切に理解しているか、またそれらについて、自らの専門領域の知見を活かして論じられるかを問う。

思想・文化論 A

本文の著者マーク・フィッシャーによれば、現代の SNS 社会では、「書かれた文書の内容ではない。むしろ読むという行為そのものが「つまらない」とされている」という。そんな「非歴史的で反記憶的な即時情報通信の文化」のなかで、じっくり腰を据えて文献を読み、論文を書くことの意義と困難について、受験者本人が文化の当事者として自身をどこまで内省的に受け止め、言語化できるかを問う。

思想・文化論 B

芸術や思想は私たちの日常と切り離し得ないなんらかの結びつきを有している。だとしたらあたりまえの日常を芸術や思想の問題として相対化し分析する視点の有無が重要な課題となるはずだ。本問題は、いまや私たちの日常の一部となっている、新しい技術の発展が可能にした経済的インフラストラクチャーを受験者が思想的課題としてどのように把握し分析するのを見る。具体的には、ここでとりあげた文書が問題にするシェアリング・エコノミーは一見すると無関係に見える統治とどのように関係するのか。受験者がどのような理論的道具立てを用いどのような理路でこれを説明し、発展的に論述するのかはかる。